伊吹山の山岳信仰

伊吹山中の行場

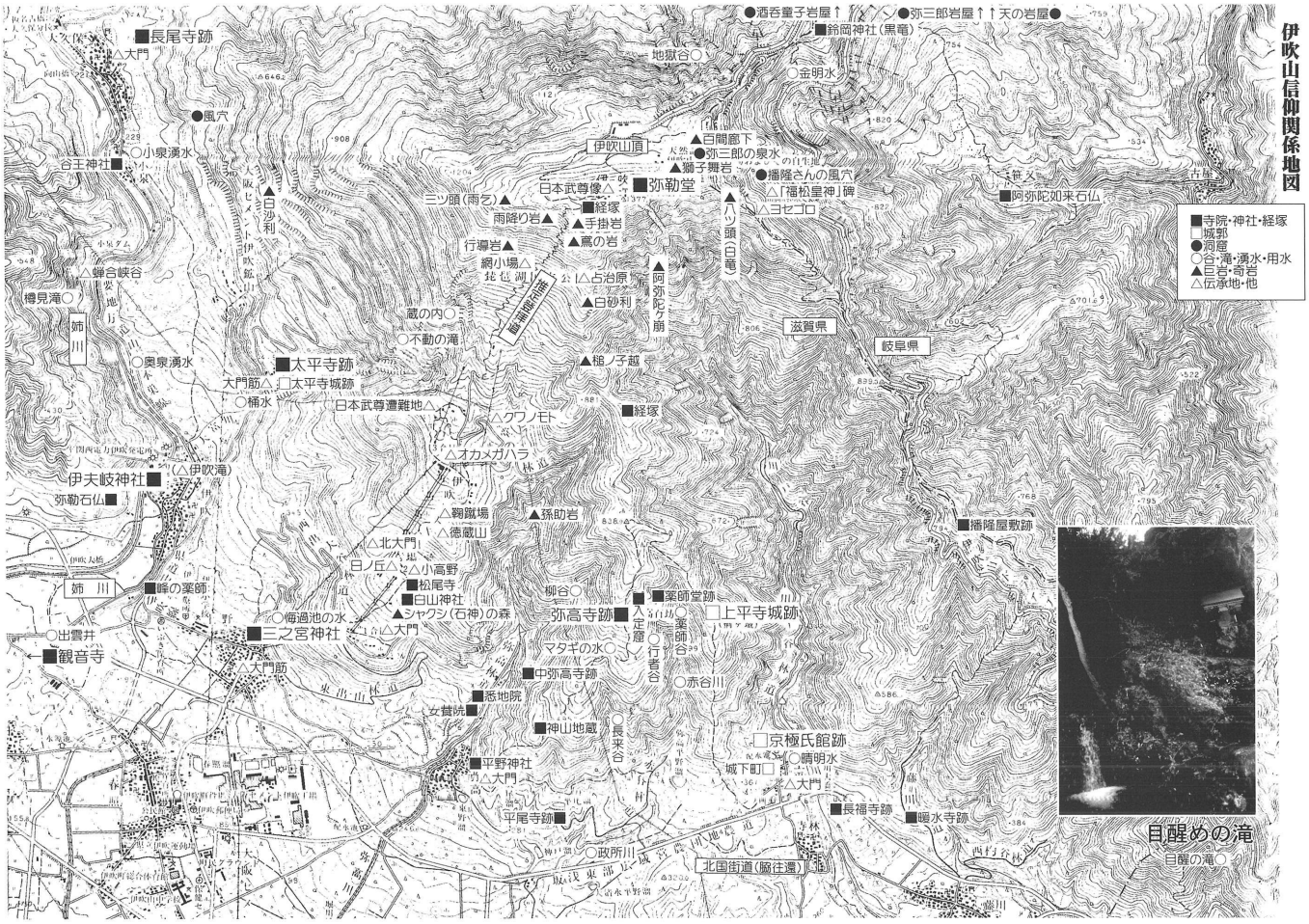
山は、古来、神とあがめられ、また、祖先の霊がこもるとされた神域です。これは、山の恵みや山からの水の恩恵を受け、ときに豪雪や強風、大雨など、人間の力ではどうしようもない自然の猛威にさらされ、山を畏れ敬った原始信仰から始まります。

日本武尊（やまとたけるのみこと）の神話は、伊吹山の神の性格を表すもので、日本中を征服した日本武尊は、最後に伊吹山の「荒ぶる神」と戦った傷がもとで亡くなります。奈良時代の書物に書かれたこの物語は、都の人々が伊吹山に対して、荒神がすむ近寄りがたい山として認識していたことを物語ります。

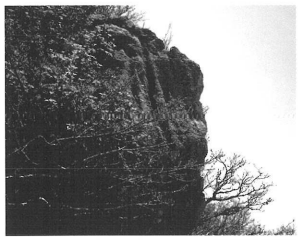
このような山であるため、その聖なる山に入り、苦行（くぎょう）をして霊力を高めようとした人々が現れました。大陸から仏教や道教（どうきょう）、儒教（じゅきょう）が伝わるとこれらを取り入れ、森をひたすら歩き、山に籠（こも）り、岩場や滝、洞窟で修行することで清められ、伊吹山の神仏と交わり、その力をいただいて不屈の行者となります。これが山伏（やまぶし）や修験者（しゅげんじゃ）と呼ばれる人々で、かつて伊吹山には多くの山伏が修行に入りました。中世には修験道本山派（聖護院・天台系）を中心に、真言密教などさまざまな宗派に属する修行者（しゅぎょうしゃ）が出入りしていたと考えられます。伊吹山の山伏は、加賀白山や紀伊熊野の先達（せんだつ）もおこなっています。江戸時代に全国各地に仏像を残した円空（えんくう）や、槍ヶ岳を開いた播隆（ばんりゅう）なども、伊吹山で最初期に修行をしています。

伊吹山の山岳信仰は、明治初年の神仏分離と、明治５年の修験宗禁止令の影響で、決定的に衰退したと考えられます。

平成25年度 埋蔵文化財活用事業



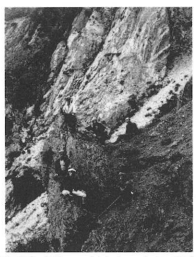
伊吹山信仰関係図



手掛け岩

雨降岩

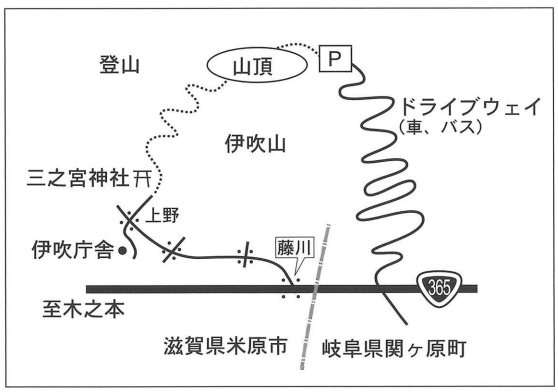
天の岩戸



阿弥陀ヶ崩れ古写真

聖なる山(霊山)の山頂は神仏が棲む場所であり、実際にほとんどの霊山の場合、目印となる小さなお堂しかなく、人が入れない禁足地になっていることもあります。伊吹山の場合は弥勒堂です。修行者は、山中の修行場で身を清め、苦行を行い、ようやく山頂で神仏と交流することができます。山頂は「聖域」ととらえることができます。中腹から山頂までには、行導岩(平等岩)、手掛岩、雨降岩、阿弥陀ヶ崩、地獄谷、蔵之内と不動の滝、弥三郎の岩屋、鞍掛岩など、修行の場所が点在しています。

伊吹山中の遺跡のあり方からは、山麓に里宮としての伊夫岐神社や、修行の出発地・三之宮神社があり、修験者や信者が参拝する寺院は中腹に展開しています(準聖域)。そこから上は厳しい修行の場であり、山頂は神仏が住む場(聖域)という明確な区分けがみられます。9合目の手掛岩にはかつて〆縄が掛けられていたといい、ここから上が神仏の住まいであるという結界を示しています。



伊吹山中の行場跡

■ 所 在 地　　滋賀県米原市伊吹山

■ アクセス　　JR東海道本線近江長岡駅下車。バス利用。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1　TEL.0749-55-4552

平成25年度 埋蔵文化財活用事業